

# 神州英人

五月号



## 俳句随想 〔三百三十五〕

汀子

雑誌「日本近代文学」の十一月号に秋尾敏氏の「『虚子没後五十年記念子規から虚子へ―近代俳句の夜明け―』展を見る」というレビューが載っている。

秋尾氏は冒頭「入場してまず驚いたのは、展示の最初が『月並俳句からの脱却』で、旧派の資料が多数展示されていることだった。旧派の資料を、ここまで詳細に紹介したものがあつただろうか。」と書き、今回の展示が画期的であつたと誉めてくれている。

更に虚子記念文学館が作成した図録を詳細に検討し、展示の構成と展示品の充実振りに感嘆し、展示の各項目の解説を書いた稲岡長、稲畑汀子、黒川悦子、内藤好之、長山あや、小林祐代、稲畑廣太郎の七人の解説を或る時は批判しながらも賞讃してくれている。

最後に「この充実した内容を、そのまま両館のウェブ・サイトに保存しておいていただきたい」と結んでおられる。

虚子没後五十年のこの企画に揮身の力を傾注した者として快哉を叫びたい思いであつた。

虚子記念文学館の理事会で、この企画を説明した時、多くの人がもつと虚子に重点を置かないと人が集らないと口々に言ったことを思い出す。そうではない。正しい歴史を踏まえた上で虚子の活動を顕彰しなければなら

# 旬日記

## 汀子

五月九日 四国ホトギス同人会

夏潮にかかる大橋点と線  
快晴といふ夏潮の風の中  
日傘さす人ささぬ人海の風

五月十日 四国ホトギス俳句大会

濃淡は島の遠近夏霞  
水音に夏めく心重ねけり  
快晴の夏めく旅となりしこと

五月十二日 大阪倶楽部

涼しさを言ひて怖さを言はぬ橋  
牡丹の花の終りは見ざりけり  
又同じ話に戻る新茶かな  
歩き来し街は夏めく装ひに

五月十二日 綿業倶楽部

これよりの庭の楽しみ若楓  
旅心通りすがりの祭とて  
木洩日は天地をつなぐ若楓  
明るさは路地にも溢れ祭かな

五月十四日 清交社

初夏の風新しき旅路かな  
信州の旅路に余花と浅間山  
風荒れて一気に初夏となる日差  
初鯉期待の旅の四国路に  
み吉野の奥千本の余花如何に  
片づかぬ書齋そのまま初夏となる  
年間の予定過ぎゆき旅五月

五月十六日 ホトギス社吟行会

神田川覚えて汗の交叉点  
一通り汗の説明聞き別れ  
ここまでは三社祭のぞめきなく

五月二十日 夏潮旬会

マロニエの花の終りし名残あり  
若き日の写真華やぐ涼しさよ  
桐の花時速百キロ高速路  
軽暖をいとはず出掛け来し人等  
水音や蜚飛ばしてみたき庭  
夜は星を仰ぐ涼しさ期待して  
芝刈つて池の水音ととのへり  
五月二十二日 時雨会

鷹渡る六甲摩耶は山つづき

五月二十三日 旬会と講演の会

涼しさをやうやく感じはじめけり  
ねぢ花のねぢりそこねし小宇宙  
見えて来る距離見えぬ距離文字措草  
五月二十四日 野分会

生きてゐる藪こはごはと触れてみる  
五月二十八日きさらぎ会

雨降れば雨に新樹の華やげる  
芝に影落す新樹となりけり  
四国路の旅の明るさ麦の秋  
渋滞の一日は雨の新樹かな  
又傘を買ひて新樹の雨に処す

平成二十一年五月二日 菅屋ホトギス会

田圃減り道は舗装路遠蛙  
マロニエの花虚子没後五十年

五月三日 関西野分会

すぐ止みて卯の花腐しとも言へず  
快晴といふ言葉こそ五月かな  
離陸今茅花流しの滑走路

五月三日 下朝旬会

今日よりは薄暑の庭の水の音  
無事終へし展示を語り春惜む  
茄子苗を植糸し一劃ある狭庭  
戦中派戦後派憲法記念の日

五月四日 ロイヤル吟行

行春の愁ひ飛鳥の大仏に  
飛鳥寺抱く大和路豆の花  
榎原の森の深さや百千鳥  
踏み迷ふ飛鳥のげんげ田の風に

五月八日 工業倶楽部

地つづきとなりたる四国旅五月  
葉桜をゆらして鷺のとび立ちぬ  
雨止んで五月の空の明るさに  
更衣して旅心いざなへる

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十一年五月四日 虚子記念文学館投句

子規も居て虚子もゐて春惜みけり

五月六日 一水会

卯浪寄す 水平線を糺しつつ  
虚子つけし名前大事に五月来ぬ

五月七日 蕉心会

オカリナの音色のやうな更衣  
五月場所前の静けさありにけり  
この雨に祭の町の清められ  
小名木川卯浪に倦んでをりにけり  
子供の日平成生れもう大人  
蕉像の五月人形めく帽子  
えらい目に遭うた卯月のレストラン  
竹の皮脱ぐんを触つたらあかん  
筈に明日の色の無かりけり

五月九日 四国ホトギス同人会、大会

島抜けて島ぬけて立つ卯浪かな  
あの橋の下辺りまで泳げさう

夏霞 一直線に電車消ゆ

噴水に子等突つ込んで行きにけり  
どつしりと橋脚仄と夏霞  
讃岐富士には夏霞及ばざる  
城壁といふ片陰を拾ひ歩す

五月十一日 朝日カルチャー若草句会

崩れんとするぼうたんの気品かな  
ぼうたんといふ品格の床となる

瀬戸内の島々統べて初夏の風  
城壁に突き当りたる初夏の風

五月十二日 銀座和塾

夏めいてきたる和光のあたりより  
母の日や孝行息子ここにあり

五月十四日 土筆会

夏霞 豪華客船吸ひ込めり  
敷島を永久に語りて御代の春

五月十五日 大塚歌謡氏DVD「大塚泰曲抄」ラナーノート

東へ西へ真直に神渡  
古都といふ落着きにあり花は葉に

笛の音に目覚めし山の笑ひ初む  
銀漢や花鳥諷詠てふ調べ

ぼうたんの武者震ひして崩れけり  
薫風を纏ひ再会果たされし

虫時雨闇を深めてをりにけり  
声といふ露けき音色ありにけり

鐘一打名月の空揺らしけり  
五月十六日 ホトギス社吟行会

風に聞く神田祭の余韻かな  
祭あとてふ静寂でありにけり

この後は三社祭に行くと言ふ  
五月十九日 草木瓜会

その日よりアメリカは友花水木  
稲城野の空持ち上げて里若葉

若葉風鳥語も染まりゆきにけり  
アスファルト宥めて若葉雨となる

花水木市花と決めたる街に住み  
五月二十日 登高会

対岸は妹の国 卯浪寄す  
麦飯は飽食の世の馳走とも

大橋に来て歪みたる卯浪かな  
麦飯を炊いて山荘暮しかな

湾は風ぎ島裏白き卯浪かな  
卯浪寄す潮の息とも鼓動とも

五月二十三日 ホトギス社句会

岩魚焼く串の角度にこだはりて  
君の声文字摺草に来て曲る

五月二十六日 若水句会

祭髪千倍君を輝かせ  
文京区千代田区繋ぐ若葉風

若葉して第二の故郷とぞ思ふ  
その後のこと考へず鯖を食ふ

五月二十七日 目黒愛学園句会

医者嫌ひ薬嫌ひや薬の日  
水辺てふ五月の風の曲り角

葉狩六十五度の斜面かな  
ビルの窓五月の空に開け放ち

新茶汲むあの日あの時あの人と  
風といふ五月の騒ぎありにけり

五月二十八日 樟城谷桂子線

聖五月セーヌの星になられしと  
五月三十一日 日本伝統俳句協会千葉県部会

蠅叩虚子の握りし凹みかな  
夏蝶の大桑の精めく飛翔

時鳥齒塚の昔語るかに

# 雑詠

## 廣太郎 選

父還る西方よりの風花に 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 風花にうつし世遠く父送る 同  
 父恋ふる心へとまた風花す 同  
 もつと混めまだ初戎らしからず 神戸 立村霜衣  
 どて焼も広島焼も初戎 同  
 賽の飛ぶ飛ぶ飛ぶ十日戎混む 同  
 それぞれに子細はあれど枯葎 東京 内藤呈念  
 今朝もまた湯婆たたみに蹴り出され 同  
 鍋囲み深谷九条と葱談議 同  
 薄紅葉富士はだんだん白くなる 熱海 嶋田一步  
 富士白くなり紅葉濃し黄葉濃し 同  
 三島駅次は新富士お茶の花 同  
 鳶の輪の乱る雪雲低く垂れ 八尾 山下美典  
 白色は雪を象徴して聖樹 同  
 殺気立つ程の賑はひ初戎 同  
 ふんだんに焼べる高原駅煖炉 京都 安原 葉  
 冬帽を深々被りきし漢 同  
 雪の来るまでは奔放枯葎 同

一片の詩のやうに種採つてをり 熊本 岩岡中正  
 懐に弔句空には鳥渡る 同  
 喪の旅のこゑもこぼさず鳥渡る 同  
 一ひらの歌留多の仮名が宙を飛ぶ 八尾 岩垣子鹿  
 初鏡歳が挨拶してをりぬ 同  
 風音のときに擦れ合ひ寒椿 同  
 セーターの聞くぐる間に一決す 神戸 山田弘子  
 ポインセチア心病む日の赤強し 同  
 清張の百年組める懐手 同  
 初日もう只の太陽高くあり 熱海 嶋田摩耶子  
 納得のゆくまで見つめ初鏡 同  
 小寒の玄関ベルは出前鮪 同  
 落葉径まだ踏み足りず逢ひ足りず 香川 湯川 雅  
 急ぎたき歩に乗り乍ら悴める 同  
 庭下駄に庇の浅し時雨雲 同  
 僧いつも小走りであり冬に入る 神戸 藤井啓子  
 笹鳴や一人になると句は生れ 同  
 虚子の句を青畝が写し冬ぬくし 同  
 千年の歴史丸呑み寺の火事 同  
 火事跡の緊張解けしホースかな 同  
 山火事の勢を止める術のなく 同  
 落葉踏む巴里の香を引くハイヒール 東京 橋本くに彦  
 青空や地球丸ごと十二月 同  
 遅れ来し浮寝の鴨のフェルマータ 同

## 雑詠句評（四月号より）

純也・しげ人・昭代

雅・仁義・暮潮

比奈夫・弘子・一步

くに彦・廣太郎

戦艦は沈みドックは露の世を 東京 大久保白村

横須賀か呉であろうか。海軍工廠といったものがあつたところであろう。そこで建造された戦艦は、長門を除いて、全て撃沈されたはずである。そのドックだけは、今も露の世に残されているのである。戦禍という社会的な事柄も、こういうふうには詠むのが花鳥諷詠なのである。（純也）

平成二十一年の九州ホトトギス俳句大会は、長崎市で行なわれた。長崎港を船で遊覧したが、そこには嘗て、帝国海軍が誇る戦艦

武蔵が建造されたドックが残っている。御存知の通りこの武蔵は昭和十九年十月二十四日シブヤン海で撃沈された。ドックのみが残されたという情が深い。（廣太郎）

タクシーをこぼれて七五三なりし 神戸 山田弘子

子供の成長の祝いとこれからの守護を願つて行われる七五三。親も子も着飾つて氏神に詣で、親戚に回礼する。まことに喜ばしい一日である。

七五三の親子を乗せたタクシーは、目的地に着くと、もはや中に詰まつた喜びを湛えることが出来ない。そのことを、降りてくる様を通して詠んだ一句である。「こぼれて」の一語が「七五三」の溢れる喜びを余すことなく伝えてくれている。季題を支え、引き立たせる一語の存在の大きさを示している一句でもある。（しげ人）

神社で行なわれる「七五三」の場合、たまたま筆者が見た時にそうだっただけでも知れないが、家族単位で三々五々集り、その都度神主が祝詞をあげていたと記憶している。この句も、ある家族の乗ったタクシーが着き、中から着飾つた子供が降りてきた。

「こぼれて」が何とも微笑ましい。（廣太郎）

天地有情

金子選

マフラー巻き星のことばを聞きに出る 神戸 山田弘子  
 星空と遊ぶいとまも十二月 同  
 戦国の露けき山路辿り来し 京都 安原 葉  
 前を行く人の目こぼし菌また 同  
 落葉積む蘇我入鹿の塚小さし 東京 稲畑廣太郎  
 石舞台落葉一片許さざる 同  
 鶴に明け鶴に暮るるは日も月も 神戸 後藤比奈夫  
 求愛の鶴の大きく美しく 同  
 星を見に厚手靴下冬帽子 東京 河野美奇  
 凍滝のかすかに楽のありにけり 同  
 かじかめる心をつつむ言葉かな 龍ヶ崎 今橋真理子  
 初日影遺愛の松のあたりより 同  
 窓小春ふたたび開かざる暇 東京 今井肖子  
 少し泣き少し笑つて十二月 同  
 談林に親しみし祖父翁の忌 徳島 上崎暮潮  
 漂泊は旅にはあらず翁の忌 同  
 去年今年なき月光の波頭 東京 今井千鶴子  
 初日いま豊旗雲に包まるる 同

父よりの簡素貫き来し雑炊 福山 竹下陶子  
 風花に一天の舞ひはじめたる 同  
 捨つべきは早きにしかず用納 たつの 浅井青陽子  
 澱おとす如もの捨て、用納 同  
 冷やかや自づと机辺引き締る 吹田 宮崎 正  
 冷やかや夜来の雨の一雫 同  
 しろがねの月わたりけり去年今年 神戸 長山あや  
 大いなる余白なりけり初明り 同  
 書初をうながす日差し文机に 熱海 嶋田摩耶子  
 初詣人は余命を持ち列に 同  
 病む窓に水鳥来しと見るばかり 同 嶋田一步  
 水鳥も増えて見に来る人も増え 同  
 豪雪の丹後の空に風花す 樺原 稲岡 長  
 輪を解いて焚火埃を払ひ合ふ 同  
 寺町と謂ひ冬ざれの寺いくつ 箕面 井上浩一郎  
 神鏡に白髪映れる寒さかな 同  
 枯木より枯木へ手触れつつ行けり 明石 中杉隆世  
 下萌のひろびるとふる雨のあり 同

# 天地有情句評

汀子

北の国から渡って来た鶴の越冬。

星を見に厚手靴下冬帽子 東京 河野美奇

冬の星座を見る身ごしらえ。

かじかめる心をつつむ言葉かな 龍ヶ崎 今橋真理子

マフラー巻き星のことばを聞きに出る 神戸 山田弘子

一緒に星の観察をした思い出の弘子さんが亡くなった。

言葉の優しさに癒されて。

戦国の露けき山路辿り来し 京都 安原 葉

窓小春ふたたび開かざる臉 東京 今井肖子

歴史が背景を飾る山路の露。

永久の別れ。

落葉積む蘇我入鹿の塚小さし 東京 稲畑廣太郎

談林に親しみし祖父翁け忌 徳島 上崎暮潮

飛鳥時代をつなぐ塚と現実の落葉。

作者の身体に流れる俳諧の血筋。

鶴に明け鶴に暮るるは日も月も 神戸 後藤比奈夫

(以下略)